

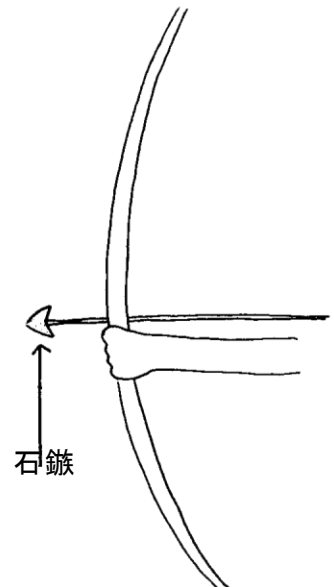
狩

食料の獲得

— 石鏃 (二股貝塚) —

知多市の歴史は、今から約8,000年前に始まる。市内からは縄文時代早期の二股貝塚を始めとして、晩期に至るまでの貝塚が見つまっている。この時代の人々にとって、狩猟や漁撈、貝や植物の採集は、食料を獲得する大切な手段であり、生活の基盤であった。

石鏃は、弓の矢じりとして用いられた石器であり、矢の先端に取り付けて使用した。弓矢は、シカやイノシシなどの獲物を獲るうえで、画期的な狩の道具であった。



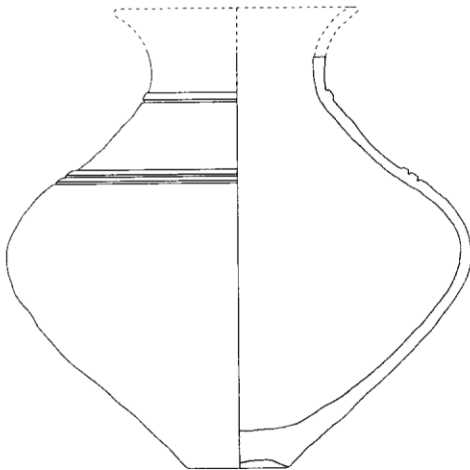
米

稲作の伝播

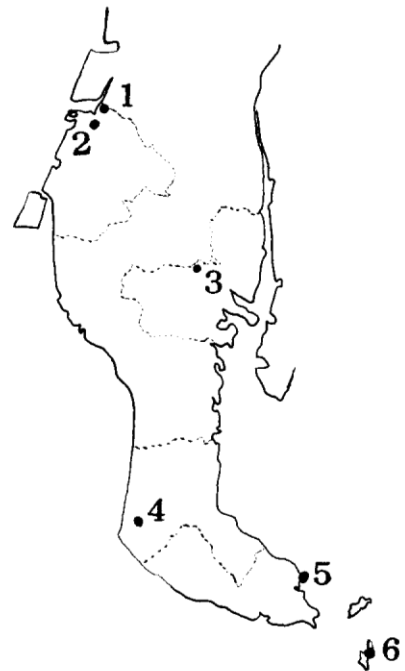
— 遠賀川式土器 (細見遺跡) —

稲作農耕や金属器を用いる技術が伝わると、従来の縄文文化とは異なる新しい文化が生み出された。北九州で出現したこの文化は、弥生文化と呼ばれ、またたく間に西日本に伝わり、やがて東日本にも広まっていった。

北九州の遠賀川流域に成立した弥生土器は、遠賀川式土器と総称される。出土した遠賀川式土器は、稲作農耕による新しい文化が、この地にまで波及したことを物語っている。



遠賀川式土器



1	荒古遺跡	知多市
2	細見遺跡	知多市
3	岩滑遺跡	半田市
4	下高田遺跡	美浜町
5	山田遺跡	南知多町
6	神明社遺跡	南知多町

知多半島の遠賀川式土器出土遺跡

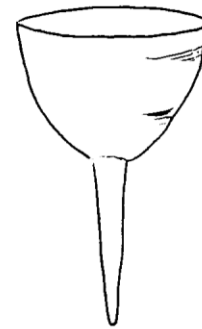
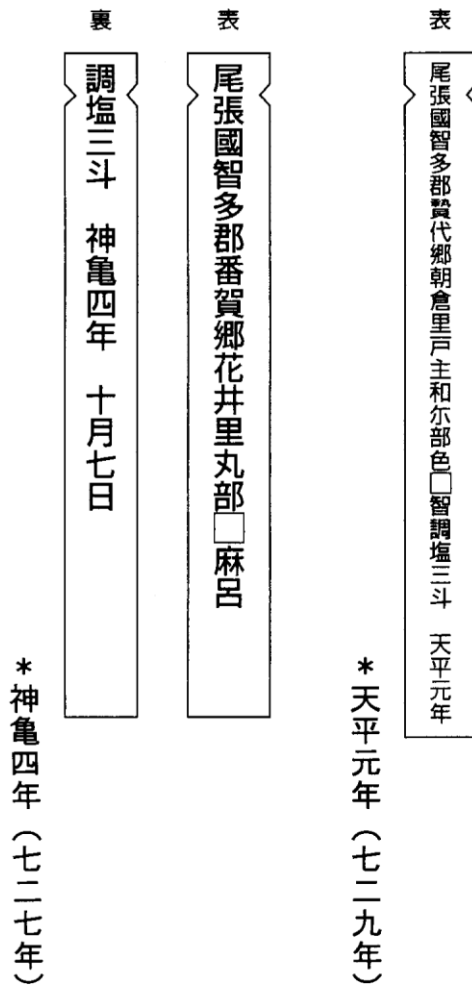
海

塩の生産

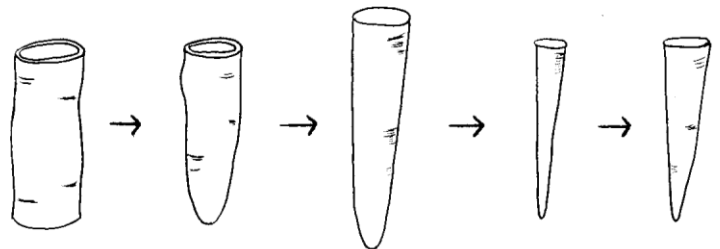
— 製塩土器 —

知多半島の海岸一帯では、古くから製塩が行われていた。また、平城宮跡から見つかった木簡には、この地域から奈良の都へ特産物の塩を送ったことが記されている。

製塩土器は、薄手に作られた碗の下に筒形や角形の脚を付けたもので、濃縮した塩水をそそぎ、煮つめるのに使用した。こうした土器による製塩は、古墳時代の後期から平安時代末の約500年にわたっていたと考えられる。



製塩土器



製塩土器脚部の変化

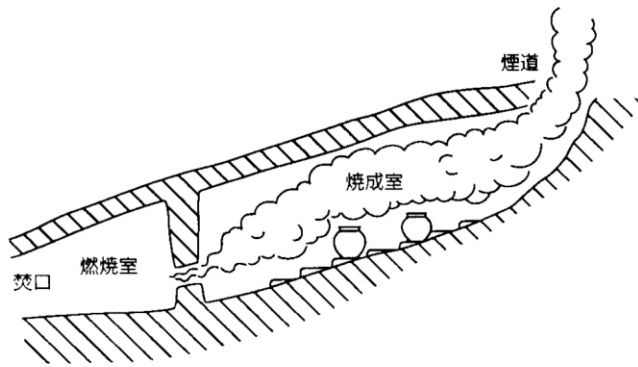
窯

丘陵の窯業

一片口鉢 (七曲古窯) —

丘陵地帯では、平安時代末から鎌倉・室町時代にかけて、多くの窯が築かれており、市内には、数百基の古窯が分布している。山の斜面をくり抜いて作った窯では、日常生活で使われる山茶碗や山皿、壺、甕などが焼かれ、各地で消費された。知多は、中世陶器の生産地でもあった。

七曲古窯は、七曲公園造成にあたって調査され、14基もの古窯が発見された。このうちの2基は、知多市の史跡として保存されている。



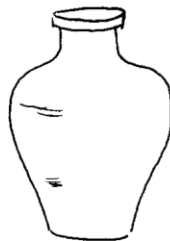
窯の構造



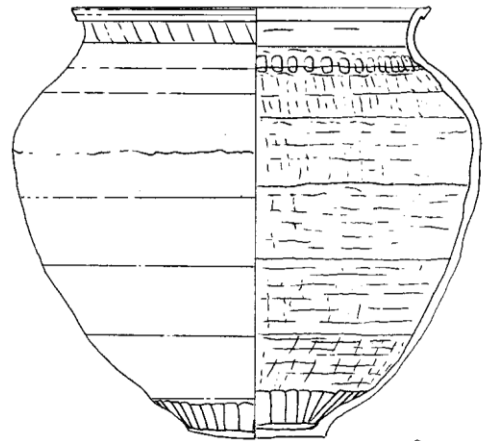
山茶碗



山皿



壺



甕

0 10 cm

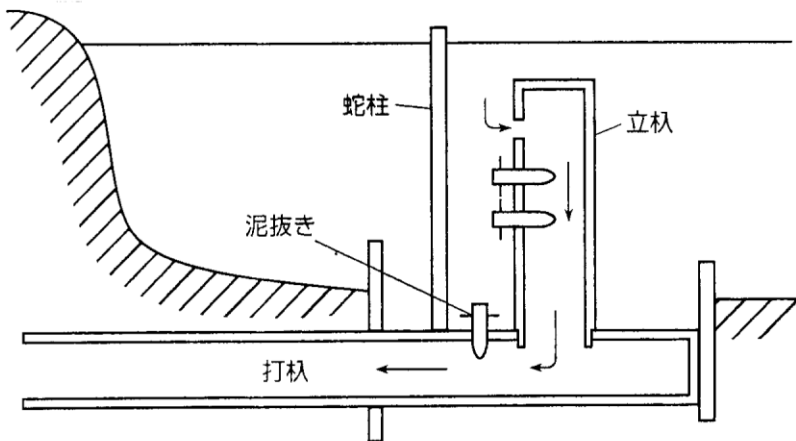
水

のう こう ため いけ 農耕と溜池

たちいり —立杵—

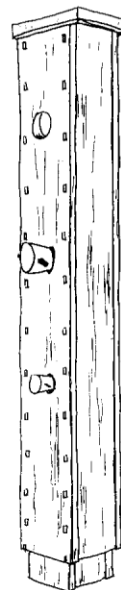
知多半島では、溜池を多く作り、水不足に備えた。池の底近くから、堤の下を横に通す樋を打杵などといい、その打杵の上に縦に樋を設けたものを立杵といった。田植えの時期になると、栓を抜いて、田地へ水を引いた。抜く栓の高さは、その時の水位に応じて決め、最下部の栓は、余程の水不足の時以外は使わなかった。

栓が水面下にあり、しかも栓を抜いた時に穴へ身体が吸い込まれる恐れがあるため、専門の「いり番」がこれにあたった。



立杵の断面図

展示資料は、新知の井龍田池から昭和45年頃掘り出された。立杵は木製であったため、20～30年で取り換えられた。



後側に
「昭和拾九年
拾月造之」
の墨書がある。

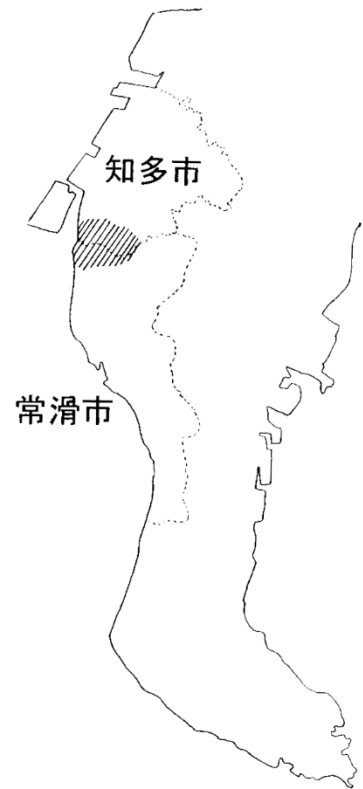
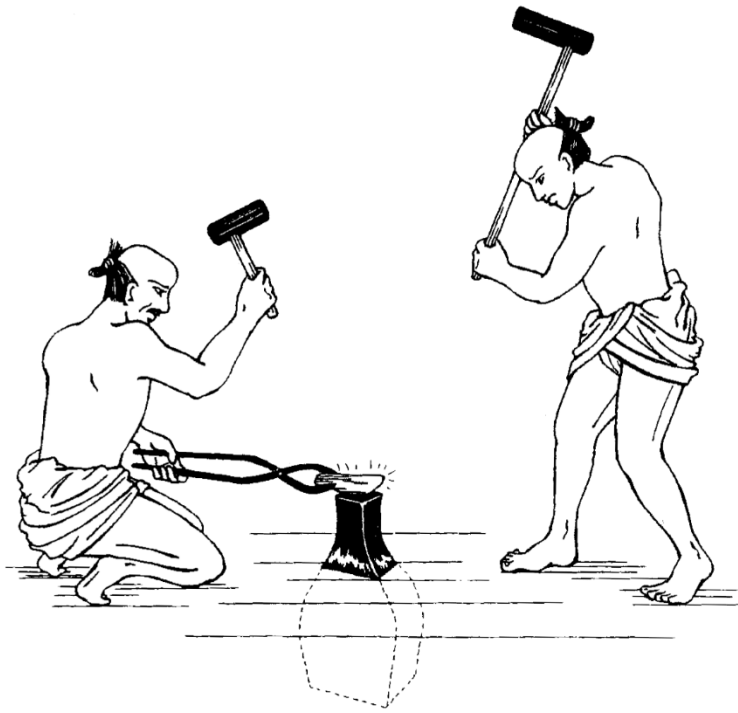
技

おの の か じ 大野鍛冶

かなとこ —金床—

下部を土に埋めて上部を出し、その上で鉄を鍛える。この金床を挟んで、親方は小槌を振るい、子方は大槌を打った。真っ赤にわかした鉄を、親方と子方が息を合わせて槌を打ち、鍛え上げ、加工していく。

春の彼岸から田植えまでと、秋の彼岸から取入れまでの農閑期を利用して、山家と呼ばれる三河山間部へ出稼ぎに行った。出稼ぎの生活は、苦労も多かったが、その技術は高く評価され、出稼ぎ先の人々にたいへん重宝がられた。



知多の鍛冶は、知多市と常滑市にまたがる大野谷が中心であったことから、大野鍛冶と呼ばれた。

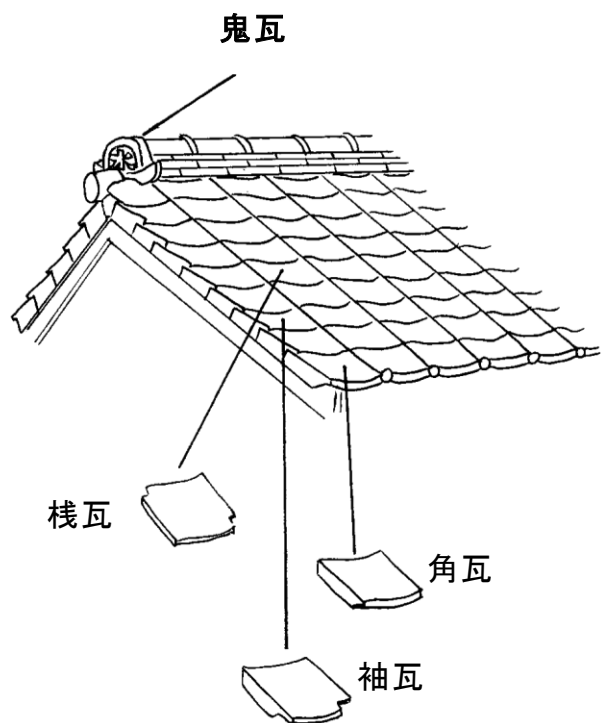
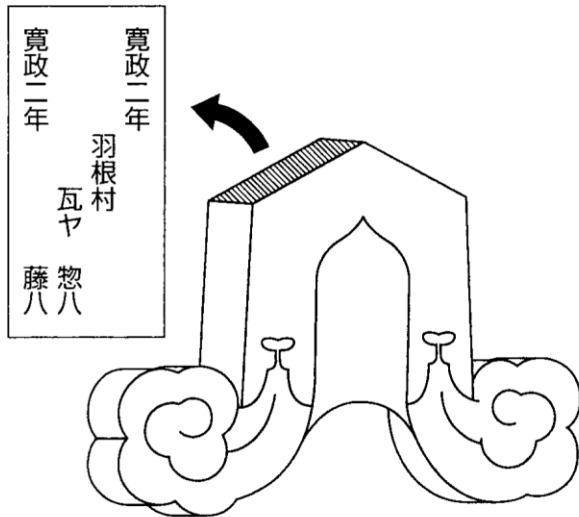
大野谷（斜線部分）

土 かわら 瓦づくり

— 鬼瓦 —

市内にある社寺には、製造した年号や瓦屋・瓦師の名が刻まれた瓦が多く残されていて、この地域で瓦の製造に携わった人々の存在を知ることが出来る。この鬼瓦も、市内の寺で使われていたもので、江戸時代に活躍した瓦屋の名が刻まれている。

鬼瓦は、屋根の棟の端に用いる大きな瓦で、鬼の面をかたどったものや、「水」の字を付けて防火を願ったものなど、さまざまなものがある。



築

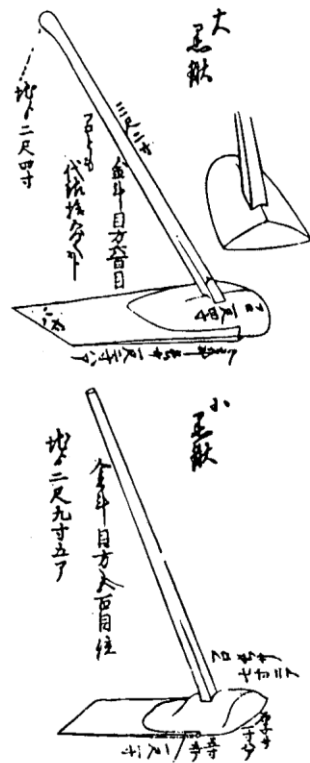
黒鋤稼ぎ

—黒鋤—

知多には黒鋤稼ぎと呼ばれる出稼ぎがあった。農閑期に他地域へ赴き、田畑の開墾や溜池・用排水路作りの他、道路普請や砂防、護岸工事などの土木作業にあたった。ふだんの農作業にも用いたこの黒鋤を始めとして、大きな石を掘り起こすツルハシ、土砂をすくい取るジョレンなどの道具があった。

明治・大正にまで及んだ黒鋤の活躍は、中部地方のみならず、関西方面にまでその足跡を残している。

おつとらとて、
尾尾ふな多郡より諸回へ土を運搬し
物々のけりて用はくは鉄とてまじり
て働の人の一てあつてもし
教へりてけりて竹の根を根をまじりて
ひきこき流す物も他の三挺の物も
ついでに流す物も他の三挺の物も
ついでに流す物も他の三挺の物も



『農具便利論』

ジョレン

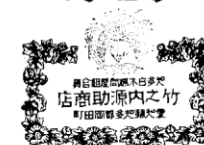
織

知多木綿

—知多晒—

知多木綿の移出は、江戸時代初期に始まったと伝えられる。特に晒技術の導入後は、「知多晒」の名で江戸へ送られるようになり、生産高を増した。知多木綿の生産は、貧しかった知多の農家にとって大切な収入源であり、その生産を底辺で支えたのは女性であった。朝は暗いうちから夜遅くまで、はたを織ったという。

江戸時代に基盤を築いた知多木綿の生産は、明治以降、工場化・機械化が進められると、知多を代表する産業として発展していった。



東京織物問屋同業組合検査本部



畳紙（晒の包装紙）

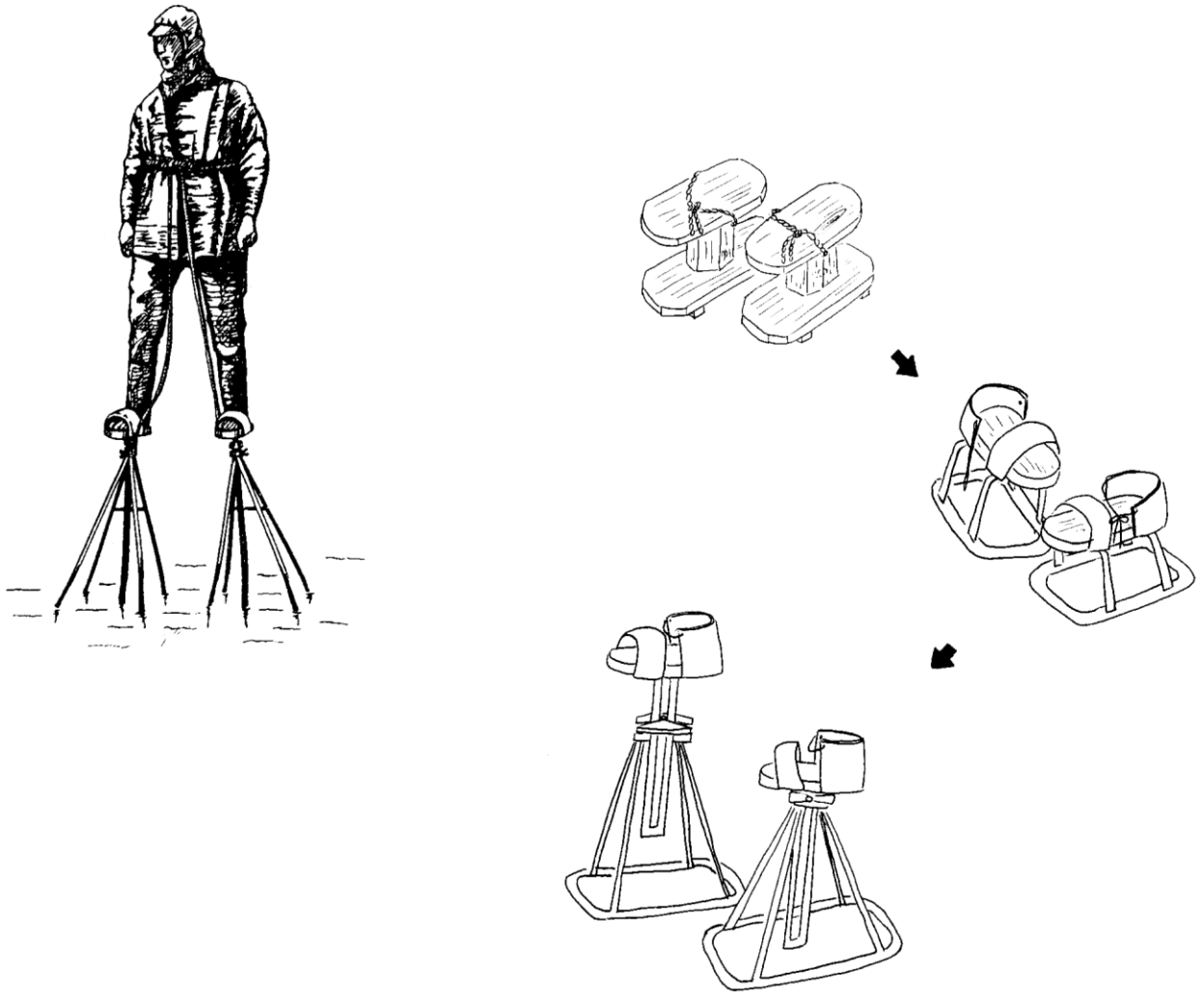
漁

のりようしょく 海苔養殖

—かいちゆうげ た 海中下駄—

海苔摘みや資材の準備など、海中での作業がしやすいように、考え出された。当初は木製であったが安定が悪いので、鉄製のものへと変わり、さらに、より深い所で作業するために高くしたり、伸縮が出来るものやより安定感があるものへと改良されていった。

遠浅の海岸を利用した当地域の海苔養殖は、昭和30年代には最盛期を迎えたが、海岸の埋立てによって姿を消した。



海中下駄の変遷